指導教員　宮城俊作　教　授
中島直人　准教授

温泉都市における景勝地の空間変容と マスツーリズムの引き潮後の市民による復興運動 −石川県加賀市の片山津温泉・山代温泉・山中温泉に着目して−

Spatial Transformation of Scenic Areas in Hot Spring Cities and Citizens' Movement for Restoration after the ebb of Mass Tourism −Focusing on Katayamazu, Yamashiro, and Yamanaka Hot Spring City in Kaga City, Ishikawa Prefecture−

206165　鈴木直輝

In scenic areas near hot spring areas, natural and cultural environment is deteriorating after the ebb and flow of mass tourism. Scenic areas are closely related to the culture of the area and the restoration of scenic areas is the key to the revival of hot spring cities. Since the Meiji era, scenic areas have been developed little by little, and the utilization of scenic areas for daily life and livelihood by local residents, which had been seen before, and the utilization of scenic areas by hot spring resort visitors coexisted. There has been a movement by citizens to restore scenic areas, and the spatial structure and social functions that scenic areas once possessed are being restored.

1 章　研究の枠組み

1-1. 研究の背景

日本には多くの温泉地があり、湯治・長逗留の時代にはじまり、地域住民や温泉客に長く親しまれてきた。温泉都市の有り様はツーリズムの変化に伴い、大きく変化してきた。特に 1960 年代から 1970 年代にかけての高度経済成長期におけるマスツーリズムでは温泉旅館の大規模化や画一化が進んだ。その後は観光客の減少に伴って、大規模化した温泉旅館の中には廃業するものが発生し、温泉街が閑散とするなど、温泉地の疲弊が進んでいる。温泉地の再生の取り組みが進み、温泉情緒や地域性が意識され、様々な観光スタイルの提唱がなされている。

温泉都市の中でも隣接する自然環境としての景勝地に着目したい。マスツーリズムを経て景勝地に拡大した温泉街の縮退が起こり、景勝地の自然環境の悪化、地域住民や温泉客などの関わりの希薄化が起こっている。その一方で、景勝地はその温泉都市の地域性を有し、温泉文化の形成に大きく寄与してきたこともあり、景勝地の再生は温泉都市の再生には不可欠である。

1-2. 研究の目的

景勝地の実態としてこれまでの空間変容や利活用の変遷、景勝地と温泉街の応答等を明らかにすること、また市民による復興運動の特徴や成果、課題等を明らかにすることを通じて、これからの温泉都市の景勝地のあり方や復興に向けた手がかり、復興運動の方向性について具体的な示唆を得ることを本研究の目的としている。

1-3. 対象地とその位置付け

本研究の対象とする温泉都市の条件として、(1)温泉地の中でもある程度の温泉街としての集積が見られる温泉都市であること、(2)古くから存在する温泉都市であり、かつツールズむの変容による影響を大きく受けたものであること、また景勝地の条件として、(3)温泉街に隣接して景勝地が立地していること、(4)温泉都市が近接して、それぞれ異なる空間構造や自然形態の景勝地を有していること、の 4 点が挙げられる。山田・宮崎[1]より条件(1)(2)を満たす温泉都市は 66 ヶ所ある。この中でも、内水面である柴山潟に隣接する片山津温泉、里山である萬松園に隣接する山代温泉、渓谷である鶴仙渓に隣接する山中温泉は近接しており、条件(3)(4)を満たすことから、これら 3 温泉都市を対象とする。

1-4. 既往研究の整理と本研究の位置付け

温泉都市の空間構造や空間変容に関する研究を整理する（図 1）。(A)では福嶋[2]などの、近世や近代の温泉街の空間構造や形成過程、温泉旅館建築の変遷を明らかにする研究が多く見られる。(C)では下村[3]の温泉地空間構造に関する一

連の研究など、温泉街の立地する地形や水系資源、形成過程、温泉街の空間構造パターンに基づく温泉都市の類型化に関する研究が多く見られる。これらの研究では景勝地を「周辺の自然環境」として扱っており、(B)に該当するような景勝地と温泉街の空間構造や応答の変容を見出す点で本研究には新規性がある。

温泉都市の活性化や再生に関する研究については、津田ら[4]、大川ら[5]、杉崎ら[6]などの「自治体主体の温泉街の景観形成・環境整備・まちづくり拠点の運営」、久保田[7]、松田[8]などの「温泉旅館やその経営者による旅館再生」、西川[9]などの「自治体や旅館による廃業施設の更新」などが見られる。本研究では「地域住民主体による景勝地の復興」に着目しており、新規性がある。

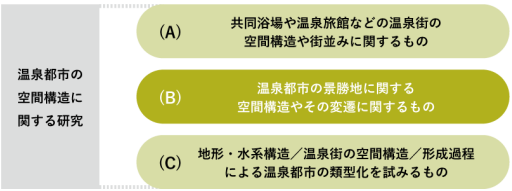

図 1 既往研究の整理

1-5. 論文の構成と研究手法

本研究は 7 つの章から構成される。1 章で研究の枠組み、2 章で対象地について扱い、3 章及び 4 章が景勝地に関する実態・変容論、5 章及び 6 章が景勝地復興に関する運動論、7 章が結論となっている。

調査手法は大きく分けて 5 つあり、「統計データに基づく、人口や観光客等の動態の分析」「古地図・地形図・航空写真・古写真等に基づく、かつての景勝地の有り様の分析」「研究論文・書籍・新聞等による景勝地及び復興運動の実態の分析」「フィールドワークによる空間利用や実態、復興運動の把握」「復興運動の主体へのヒアリング調査・アンケート調査」である。6 章の萬松園再生プロジェクトは筆者が代表を務める復興運動であり、筆者自身との関わりから分析を試みている。

2 章　対象地について

2-1. はじめに

本研究の前提となる、加賀市や各温泉都市の空間構造や歴史等の概要を整理する。

2-2. 対象地の概要

対象地である石川県加賀市は南部に広がる山林から丘陵地や山地が北部にまで延びてきて、まちに隣接する里山が形成されている。また、南部の山地を水源として、加賀市北西の日本海まで丘陵の合間を大聖寺川及び動橋川などの河川が流れ、渓谷や湖沼を形成している。市の自然構造が骨格となり、景勝地の自然環境を生み出している。

2-3. 各温泉都市の概要

山代温泉や山中温泉は古代頃に、片山津温泉は明治初期に温泉地として成立した。中世以降、惣湯（総湯）と呼ばれる共同浴場を核に温泉街が形作られてきた。

2-4. 対象地の暮らし・観光を巡る状況

加賀市の人口については 1990 年の 80,720 人をピークに減少傾向が続いている。加賀市の温泉地入込客数については、1970 年代から 80 年代にかけて著しい増加が見られ、1986 年の約 397 万人がピークである。近年ではピーク時の半数程度まで減少し、マスツーリズムの引き潮として、宿泊施設のストックの余剰などが発生していると考えられる。

3 章　プレマスツーリズムにおける景勝地の変遷

3-1. はじめに

それぞれの景勝地の空間変容や温泉街との応答などの歴史的な変遷について整理する。景勝地の変遷をいくつかの時代に区分した（図 2）。

3-2. 片山津温泉と柴山潟

縄文時代頃より (K-1)、柴山潟は漁業や稲作、物流、交流など、地域住民の食糧生産や人・物の移動に利用されていた。

図 2 景勝地の変遷と時代区分

1876 年の泉源の埋め立て以降（K-2）、柴山潟に隣接して温泉旅館や貸しボート屋が立地し、それらの桟橋から遊覧船や釣り船などの運航が見られるようになった。温泉旅館は水面に近い露天風呂や客室を有し、庭園は柴山潟とシームレスに繋がるなど、高い親水性が見られた。段階的な柴山潟の埋め立てが温泉旅館によって進められ、そうした漸進的な埋め立てによる渚空間が子どもたちの遊び場にもなっていた。漁業や鴨打ちなどの地域住民による生業の様子も風物詩の一部として捉えられていた。

3-3. 山代温泉と萬松園

古代頃より（S-1）、現在の萬松園は薬師山として、白山遥拝所としての利用や山野草の利活用が見られた。

1603 年の加賀藩の留山の御触れ以降（S-2）は燃料利用を目的とした落ち葉や枯れ枝の採取がなされ、明治時代以降に一帯が民有地に分けられたことを契機として、燃料採取がよりなされるようになった。この頃にはまだ散策路などはなく、温泉客の散策は近くの寺社等に留まったとされる。

1898 年の萬松園が公園化されてから（S-3）は、遊歩道や料亭、茶屋などができ、マツタケ狩りツアーなどが行われた。これまでと同様、生活や九谷焼を目的とした燃料採取や建材としての利活用など、地域住民による様々な生業が見られるようになった。また萬松園に面する温泉旅館では、萬松園を取り込む離れの増築や庭園の造成などの動きが見られた。

3-4. 山中温泉と鶴仙渓

明治時代以前（N-1）は、大聖寺川渓谷はアクセスが悪く、近隣の社寺や名所への行楽に留まっていた。

1886 年の蟋蟀橋とその袂の料亭の建設以降（N-2）、アクセスが改善され、料亭では川辺に御亭や縁台を出した水辺活用や川下りなどが見られるようになった。1909 年には料飲組合によって大聖寺川沿いの川淵の散策路や名所が作られ、現在の鶴仙渓遊歩道の原型となった。蟋蟀橋の風情や大聖寺川での漁業などの生業の風景も風物詩として詩歌に詠まれた。

1931 年の山中温泉大火を経て（N-3）、その復興では都市美運動の展開が見られ、鶴仙渓沿いへの温泉旅館の立地が見られるようになった。

3-5. 小結

江戸時代以前は、湯治や長逗留がなされるものの景勝地へのアクセスの悪さから、近辺の寺社等への散策に限られた。食糧生産や燃料調達、交通や物流の動線など、地域住民による生活・生業の一部としての利活用がなされた。

明治時代以降、景勝地の整備が進み、これまでに見られていた地域住民による生活・生業としての利活用がより多様化するとともに、温泉

空間構造	柴山潟	萬松園	鶴仙渓
アクセス性	温泉旅館や貸しボート屋の桟橋	社寺境内地、参拝路	蟋蟀橋や黒谷橋などの橋
回遊性	釣り船、遊覧船など	萬松園内の遊歩道、八十八ヶ所石仏	鶴仙渓遊歩道、川舟
景勝地活用性	貸しボート屋、魚屋、料亭など	料亭、九谷焼窯元、魚屋（氷）など	料亭、船着場、山中漆器工房など
滞留性	遊泳場、屋形船など	名所、料亭、御亭、茶屋など	名所、料亭、茶屋、劇場など
温泉旅館の親景勝地性	柴山潟への親水性の高い造り	萬松園に繋がる客室や庭園	鶴仙渓に繋がる庭園や散策路
余白性	温泉街と柴山潟の間の渚空間	薬王院温泉寺などの社寺境内地	鶴仙渓遊歩道や接続した広場
漸進性	温泉旅館による埋め立て	石段や石仏付属品の整備	鶴仙渓遊歩道や隣接山林の整備

社会的機能	柴山潟	萬松園	鶴仙渓
日常利用性	漁業、鴨打ち、農業、物流、往来など	こっさ、薪、氷、マツタケ、薬草など	釣り、漁、洗濯など
遊び場性	釣り、磯遊び、水泳など	遠足、マツタケ、しいのみ拾いなど	遠足、川遊び、釣りなど
体験性・収益性	貸しボート、船遊びなど	マツタケ狩りツアーなど	船遊びなど
シーン性	四手網漁や鴨打ち、船など	周辺への眺め、茶屋、溜池など	名所、料亭、茶屋、劇場など
多様性	柴山潟や渚での様々な利活用	萬松園や麓での様々な利活用	大聖寺川や川淵での様々な利活用
資源循環性	藻→肥料、ヒシ→食料など	雑木の伐採→燃料→林床整備など	–
持続可能性	水・渚の環境マネジメント	マツタケの生育環境の維持	山林の風致維持

図 3 各景勝地と空間構造・社会的機能との対応関係

客による景勝地ツーリズムが見られ、それらが共生していた。その下で、地域住民による生活・生業としての利活用により、自然環境の手入れがなされ、自ずと環境保全が実現していた。また、生活・生業としての利活用と景勝地ツーリズムの共生期においては、3 つの景勝地で共通した空間構造 7 要素と社会的機能 7 要素が背景として見られた（図 3）。空間構造の 7 要素は、(1)アクセス性｜桟橋や橋、遊歩道などの温泉街から景勝地へのアクセス、(2)回遊性｜遊歩道や船などの景勝地内を回遊するツール、(3)景勝地活用性｜景勝地の空間や資源を活用する施設の立地、(4)滞留性｜名所や御亭、茶屋、視点場など景勝地の空間を楽しむ設え、(5)温泉旅館の親景勝地性｜景勝地の空間やアクティビティが連続する温泉旅館のつくり、(6)余白性｜埋立地や寺社境内地などの主体の共存を許容するパブリックスペース、(7)漸進性｜段階的な景勝地の整備プロセス。社会的機能の 7 要素は、(1)日常利用性｜食糧生産や燃料調達など、生活や生業のための日々の利活用、(2)遊び場性｜子どもたちの遊び学ぶ場としての利用、(3)体験性・収益性｜船遊びやマツタケ狩りツアーなどの観光客の景勝地での体験とそれらの運営による地域住民の生業の広がり、(4)シーン性｜生活・生業の様子や景勝地の風景の風物詩化、(5)多様性｜生活や生業としての利活用や景勝地ツーリズムの多様性、(6)資源循環性｜様々な利活用による景勝地の資源循環、(7)持続可能性｜景勝地の環境が維持される利活用のバランス。

4 章　マスツーリズムの引き潮における景勝地の実態

4-1. はじめに

それぞれの景勝地におけるマスツーリズムの引き潮の実態を整理し、空間構造、社会的機能の喪失を明らかにする。

4-2. 片山津温泉と柴山潟

湖畔での大規模な温泉旅館の立地や柴山潟の埋め立てなどによって、宿泊施設の廃業や外装の経年劣化に伴う景観の悪化や、湖畔の公共空間の減少、生活排水等の増加に伴う水質汚濁、流域からのゴミの流れ込み・漂着が見られた。遊覧船などの温泉客の船遊びや渚などでの子どもの遊びなどは見られなくなった。

4-3. 山代温泉と萬松園

萬松園の内部や隣接地への大規模な温泉旅館の立地や萬松園にアクセスする道の廃道などによって、景観の悪化や眺望の阻害、学校や宿舎等の施設跡地などの低未利用地の発生、維持管理が十分なされなくなった事による里山環境の荒廃や野生動物の出没などが見られた。温泉客によるマツタケ狩りや地域住民による燃料調達、子どもたちの遊びなどが見られなくなった。

空間構造	柴山潟	萬松園	鶴仙渓
アクセス性	現在主に使われる桟橋が１ヶ所に	温泉街から萬松園への道が減少する	蟋蟀橋や黒谷橋などの橋
回遊性	遊覧船等の運航が見られなくなる	遊歩道やその周辺の管理が不十分に	川舟などの運航はされなくなる
景勝地活用性	魚屋、料亭が減少する	景勝地の活用が見られなくなる	料亭、船着場などが見られなくなる
滞留性	遊泳場、屋形船などが見られなくなる	栄螺堂や東屋などに限られる	名所や御亭などに限られる
温泉旅館の親景勝地性	堤防などで分断される	旅館の建築・敷地内外で分断される	旅館の建築・敷地内外で分断される
余白性	パブリックスペースが消滅する	薬王院温泉寺などの社寺境内地	鶴仙渓遊歩道や接続した広場
漸進性	–	–	–

社会的機能	柴山潟	萬松園	鶴仙渓
日常利用性	漁業や農業などに限られる	旅館の料理の一部使用に限られる	日常的な利用がなされなくなる
遊び場性	釣りなどに限られる	遠足などに限られる	遠足などに限られる
体験性・収益性	船遊びなど行われなくなる	マツタケ狩りなど行われなくなる	船遊びなど行われなくなる
シーン性	柴山潟からの白山への眺めのみに	萬松園からの白山への眺めのみに	鶴仙渓における自然景観のみに
多様性	漁業などに限定	散策などに限定	散策などに限定
資源循環性	資源が循環されなくなる	資源が循環されなくなる	–
持続可能性	自然環境の悪化	自然環境の悪化、マツタケの廃れ	河畔林の繁茂やマツ枯れ

図 4 マスツーリズムの引き潮における各景勝地と空間構造・社会的機能

4-4. 山中温泉と鶴仙渓

鶴仙渓沿いの温泉旅館の大規模化や上流におけるダム整備などによって、景観の悪化や眺望の阻害、河畔林の繁茂、斜面林の松林の荒廃、子どもたちを遊ばせる機会が少なくなる地域住民の関わりの減少などが見られた。

4-5. 小結

マスツーリズムの隆盛に伴う、景勝地への大規模な温泉旅館の立地、温泉旅館による景勝地へのアクセスの低下、温泉都市として温泉街や住宅街の発展、大規模なインフラ整備などが起こった。そうした温泉街の拡大や社会基盤の整備によって、マスツーリズムの引き潮として景観の悪化、自然環境の悪化、地域住民や温泉客による関わりの低下が見られた。これまで景勝地が有していた空間構造及び社会的機能が失われた（図 4）。

5 章　市民による景勝地の復興運動の様相

5-1. はじめに

荒廃した景勝地の復興に向けた市民による取り組みの実態を明らかにする。

5-2. 柴山潟における復興運動

地域住民有志による柴山潟を周遊して観光客にガイドを行うクルーズ体験の取り組みや、SUP やカヤックによる柴山潟の周遊、ゴミ拾いなどの取り組みが起きている。

5-3. 萬松園における復興運動

旅館、商店街、婦人会などの女性からなる団体による植物の育成や石段の清掃、整備などの取り組み、地域住民による桜の植樹や草刈り、木工体験などの取り組み、地域住民による歴史研究などの取り組みが起きている。

5-4. 鶴仙渓における復興運動

山中温泉観光協会による各線形の川床の設置、営業などの取り組み、旅館経営者など有志による鶴仙渓の自然や山中温泉の文化の蘇生に向けた取り組みが起きている。

5-5. 小結

市民による復興運動の特徴として、(1)旅館経営者や商店主などの観光に関わる人も含めた、地域住民主体であること、(2)かつて景勝地で遊んでいたなどの「景勝地での思い出」や、次世代以降は景勝地に親しむことがなかったという課題意識に基づく「次世代への景勝地の継承」が復興運動の発端にあること、(3)復興運動の取り組み内容は「環境の手入れ・名所づくり」「景勝地のガイド・体験の提供」であること、の 3 点が明らかになった。こうした復興運動によって、空間構造としては回遊性や滞留性、社会的機能としてはシーン性や体験性・収益性の回復が見られる。

また、地域住民に加えて移住者や関係人口が復興運動の主体になることや、観光客だけでなく地域住民や移住者なども復興運動の対象になるなど、復興運動の新たな広がりも確認される。

6 章　復興運動【萬松園再生プロジェクト】の検証

6-1. はじめに

筆者が代表を務め、地域の方々とともに萬松園の再生に向けて取り組む「萬松園再生プロジェクト」を復興運動の社会実験と位置付け、復興運動の射程を分析する。

6-2. 山代温泉・萬松園における復興運動としての社会実験の設定

萬松園再生プロジェクトでは、空間構造として萬松園の代表的な、象徴的な植生であるアカマツ林の再生、社会的機能として子どもの遊び場の回復を方針に据えた。

段階的な社会実験の運営に合わせて、学習支援団体や林業アドバイザー、増援業者、復興運動に携わる地域団体、寺社などと協力する主体のチーム作りを進めた。

6-3. 「萬松園再生プロジェクト」の社会実験の内容

図 5 萬松園再生プロジェクトでアプローチした空間構造・社会的機能

(1)アカマツ林の再生や手入れ、子どもたちとともに自然や歴史とともに遊び学ぶ「活動・プログラム」、(2)長期的な萬松園の再生の方向性を示すグランドデザインの立案等の「ビジョン」、(3)活動の報告や今後の活動の方向性の発表などの「プレゼン・報告会」、(4)新聞やテレビなどのマスメディア、町報、SNS などによる「メディア・情報発信」、以上 4 つに取り組んでいる。

6-4. 社会実験の成果

萬松園再生プロジェクトに様々な主体を巻き込むことで、空間構造として回遊性、景勝地活用性、余白性、漸進性の回復、社会的機能として日常利用性、遊び場性、多様性、資源循環性、持続可能性の回復が見られた（図 5）。

6-5. 小結

復興運動の主体の広がり、連携の広がりによって、より多くの空間構造、社会的機能の回復にアプローチすることができる。一方で、萬松園再生プロジェクトが市民発地であり、温泉街などの広域まで含めた空間構造の回復や、温泉客を対象とする社会的機能の回復へのアプローチが不十分であると言える。

7 章　結論

7-1. 結論

景勝地の空間変容やマスツーリズムの引き潮の実態について、(1)明治時代から大正時代にかけて景勝地の整備が段階的になされ、地域住民による生活や生業のための利活用と温泉客による景勝地ツーリズムが共生し、景勝地の環境が保全されていた、(2)共生の背景には景勝地の有する空間構造 7 要素と社会的機能 7 要素が見られた、(3)マスツーリズムの引き潮において景勝地の荒廃が進んだことは空間構造と社会的機能が喪失したことが関係している。

マスツーリズムの引き潮における景勝地の復興運動とその成果と課題、可能性については、(4)市民主導による景勝地の復興運動によって、空間構造、社会的機能の部分的な回復が見られる、(5)復興運動に関わる主体が連携することで景勝地の復興に繋がる、(6)市民による復興運動と合わせて、温泉街も含めた広域スケールでの空間構造、社会的機能の回復を図ることが求められている。

7-2. 温泉都市の景勝地の復興に向けた示唆

明治時代以降の景勝地の整備に伴う空間構造及び社会的機能によって、地域住民による利活用と温泉客による景勝地ツーリズムが共生し、自ずと景勝地の環境が保全されてきた。そうした景勝地の利活用とマネジメントの構造がマスツーリズムによって損なわれてきた。

自ずと景勝地が保全される構造が失われているため、今後は市民による復興運動を起点として、利活用も含めた計画的な景勝地マネジメントを図る必要がある。計画的な景勝地マネジメントにより、空間構造と社会的機能を回復し、地域住民の暮らしの質の向上及び移住者・観光客の滞在の質の向上までをひとつながりのものとして景勝地で実現することが求められている。

また、復興運動のさらなる展開に合わせて、景勝地に隣接する温泉旅館など温泉街も含めたスケールで、そして公民連携で空間構造と社会的機能の回復を進めていくことが欠かせない。

7-3. 本研究の限界と今後の課題

他の温泉都市の景勝地においても明治時代頃から整備されてきたと考えられる。本研究では 3 つの対象地から景勝地の実態及び復興運動を捉えたが、他の景勝地も合わせて整理を行うことで、分析の精度をより高めることができると考えている。

参考文献

[1] 山田桐子・宮崎均一(2008),「温泉街における地域特性からみたまちづくりに関する研究 −地理的条件ならびに形成過程からみた地域特性の傾向−」,「日本建築学会計画系論文集」,73(626),pp819-826

[2] 福嶋啓人(2015),「共同浴場を中心とした温泉町の空間変容過程について　近代加賀山中温泉を事例として」,「日本建築学会計画系論文集」,80(711),pp1223-1231

[3] 下村彰男(1992),「近代における温泉地空間構造の変遷に関する考察」,「造園雑誌」、56(5),pp241-246

[4] 津田夕梨子・峯苫俊之・十代田朗・津々見崇(2010),「伝統的温泉街における景観への取り組みに関する研究」,「日本都市計画学会都市計画論文集」,45(1),pp51-56

[5] 大川恵理子・坂井文・越澤明(2011),「定山渓温泉における地域主導による環境整備の変遷と特色について」,「日本建築学会技術報告集」,17(36),pp667-680

[6] 杉崎康太・後藤春彦・田口太郎(2007),「観光地におけるまちづくり拠点の効果的運営手法の検討 : 群馬県みなかみ町湯原温泉街におけるまちづくり拠点の運営実験を通して」,「日本建築学会計画系論文集」,72(622),pp97-104

[7] 久保田美穂子（2008）,「温泉地再生−地域の知恵が魅力を紡ぐ」, 学芸出版社

[8] 松田充史(2012),「温泉観光再生のためのまちづくりと旅館経営の新しいあり方−加賀温泉郷の事例を中心に−」,「第 27 回日本観光研究学会全国大会学術論文集(2012 年 12 月)」,pp333-336

[9] 西川亮(2021),「官民による温泉地における廃業施設の更新に関する計画論研究　2000 年代以降の加賀市における実態を対象として」,「日本建築学会計画系論文集」,86(779),pp137-147